

会員増強委員会だより

第4回 aaca サロンの開催報告

『現代のライフスタイルと伝統工芸のブランディングプロジェクト』

那須恵子（型屋 2110 伊勢型紙彫師）
江上浩生（有限会社N工房）
堺 若菜（リリカラ株式会社）

株式会社大林組設計本部長室
日本建築美術工芸協会法人会員
会員増強委員会委員
都築良典



aaca サロン第4回は、リリカラ株式会社より、「現代のライフスタイルと伝統工芸のブランディングプロジェクト」と題して、リリカラのデザイナー・堺若菜さん、伊勢型紙彫師・型屋 2110 の那須恵子さん、金銀砂子細工師・N 工場の江上浩生さんが登壇、インテリアにおける伝統工芸の新たな役割とそのブランディングの在り方について語っていただきました。

初めに那須さんと江上さんにより、伊勢型紙と金銀砂子細工の工芸として発展した経緯と、現代の生活に適應するモノとしての展開が語られ、その後堺さんから、伝統工芸を現代のブランドとして確立を目指す自社の試みについて、伊勢型紙のインテリアへの展開を例に、3人の鼎談を交えつつ紹介がありました。

那須さんが彫る伊勢型紙は、切り絵のように模様を彫刻した和紙で、着物などを染める型（道具）として現代まで受け継がれてきました。三重県鈴鹿市で15世紀に始まり、1985年に伝統的工芸品に指定、現在国指定重要無形文化財であります。手すき和紙と接着剤（防水・防虫剤）である柿渋で作る道具として、彫刻技法を駆使して独特の紋様の図柄を彫り作られます。暖簾、浴衣、江戸小紋の図柄として発展、その高度な技術は今後様々な素材への展開が見込めます。実例としてジュエリーなどのプロダクト、商業施設のインテリアへの応用などが紹介されました。

伊勢型紙の価値は、その「デザイン」だけでなく「彫刻技術」「機能」により、日本人の美意識、習慣、文化を表すことにあると那須さんは語っています。良質の和紙、刃物の製造技術等に支えられてできる型紙自体が、幅広く協働できる技術（機能を持つ道具）であること、故に型紙の制作バックストーリーを伝えることの大切さ、ものづくりの深い理解を得ることの大切さを説かれました。

江上さんは、伝統工芸の箔、砂子細工、和紙染色を主に、現代の住空間、商業空間に合う、新しいものづくりに挑戦しています。

砂子細工の技法に加え、染色、揉み紙、櫛引、削ぎ落とし等、多様な「からかみ技法」を紹介し、制作に使用する実物の道具を示しながら、手作りの細工が唯一無二のものづくりに繋がることを説かれました。

紹介された和紙壁紙は、空間の意図に合わせた個性的な表情を作り出していました。襖紙から始まりアートパネルやカウンターバック等、現代のインテリア素材として発展、空間のアクセントとしても主張できる作品でした。

リリカラの堺さんからは、「kioi—伊勢型紙を現代のインテリアに—」と題して、江戸時代に伊勢型紙の保護をした紀州藩ゆかりの紀尾井町にある、紀尾井アートギャラリー「江戸の伊勢型紙美術館」との共同企画から生まれた壁紙について紹介がありました。壁紙ブランド「kioi」は、手仕事の良さを工業製品に生かす取り組みとして、伝統工芸としての伊勢型紙の図柄を現代のインテリアに生かすプロジェクトです。

リリカラでは、各地にある江戸時代から続く伝統工芸の作品

を、インテリアとして一つの空間に組み込む試み、その発信を行っています。

伝統工芸のブランディングには、それが現代の人々に共感をもって受け入れられ、信頼のおけるモノとして末永く使い続けていただく、より積極的な働きかけが求められていることが鼎談で語られました。

図柄などの意匠性と共にその素材そのものが持つ機能、美しさと手仕事の技術の持つ共感性が重要であると…。

コロナ禍において、仕事を含めた生活様式の変革が起きています。また、世界中で環境負荷低減への取り組みが求められています。伝統工芸においては、これらに適合、変革に適應した生産力になるものとして期待したいところです。

第4回 aaca サロンは、新規会員のリリカラ様より、プロダクトを通じてお付き合いのある二人の伝統工芸師をお招きしての会となりました。この機会を通じてお二人に aaca の活動をご理解いただくと共に、さらに交流の輪が広がることを期待しています。



伊勢型紙 むじなハート 那須恵子



からかみの技法 江上浩生



壁紙ブランド「kioi」 リリカラ株式会社
堺若菜

第4回 aaca サロン撮影風景